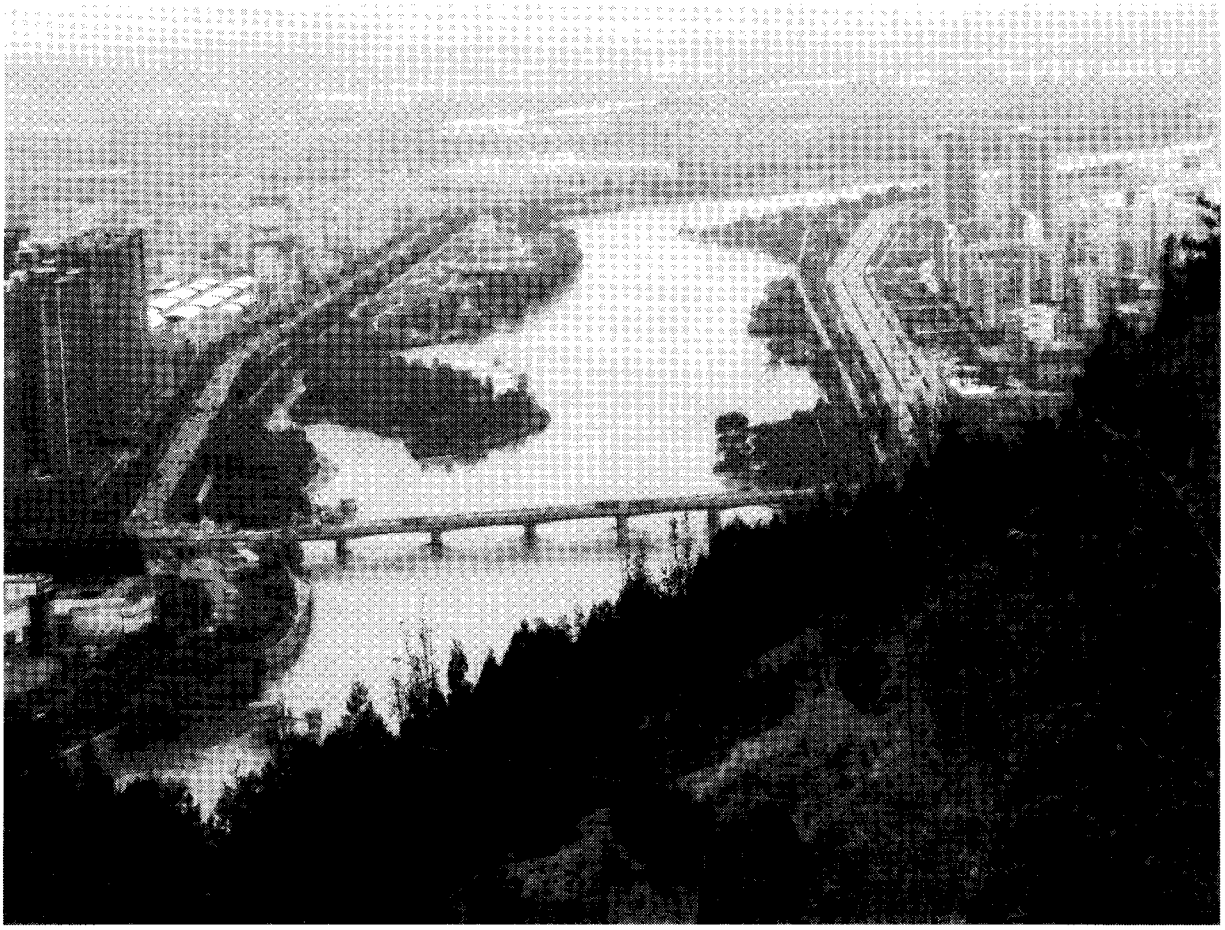
2008
vol.10
Feb

黄河の森
KFG

発　　行／特定非営利活動法人
黄河の森緑化ネットワーク
代表理事／林　同　春
編集責任者／林　青　彦 事務局長
〒650-0011
神戸市中央区下山手通り2丁目12-11
神戸華僑会館内
TEL・FAX:078-392-8328
E-mail:kouganomori@s6.dion.ne.jp
URL.http://www.k3.dion.ne.jp/~kougakfg
IP:05031111874



蘭州市内を流れる黄河

北山九州台より西方を見る

ああ　あの大河　太古より　流れる誇り
ああ　その緑　永久に　たやさぬ心
燃えたつ生命　ここに　ここに

CONTENTS

P.2　三井物産環境基金プロジェクト始動
P.3　植樹ワーキングツアーに参加して
P.4　私と環境（8）　丹波市・下滝いろいろ
P.4　絵本からのエコ・メッセージVI
P.5　黄土高原の植物IX
P.5　2008年植樹及びクリーンキャンペーンの日程
P.6　点訳と私

三井物産環境基金プロジェクト始動

蘭州各機関と調整、交流

先の会報 vol.9でお知らせをしましたが、三井物産環境基金の助成を受けて、早速活動を開始し、2007年7月～9月に2回、蘭州に赴き関係機関・部門との調整や打ち合わせ、各種の聞き取り・交流・調整などを行った。大要を次のように報告します。

＊第1回目は7月30日～8月8日、担当メンバー5名が活動を行った。

①カウンターパート・蘭州市南北両山環境緑化工程指揮部の訪問。
三井物産助成金により、第2期緑化協力の計画期間6年から3年間への短縮に伴い、計画の変更、協定書の文言修正などの調整を行った。新たに三水造林と菌根菌を活用した試験区設定の説明および協力を依頼した。また、指揮部の行政外関係官署との連絡の協力などもお願いした。

②外国との窓口になる蘭州人民政府外事辦公室の訪問。KFGが蘭州市民を対象とした緑化にかかるアンケート調査、小中学校への訪問講演、植樹交流などの計画について説明し、協力を依頼した。

③民間環境保護組織を2回訪問。
この組織は2004年に設立したNGOで、学校での環境教育、省エネ問題への取り組み、植樹交流などのボランティア活動状況や運営方法の聞き取りおよび意見交換をした。

④蘭州大学生態学専門の王剛教授との懇談会では、王教授より蘭州の気象や緑化方法、問題点そして今後の研究についての説明を受けた。

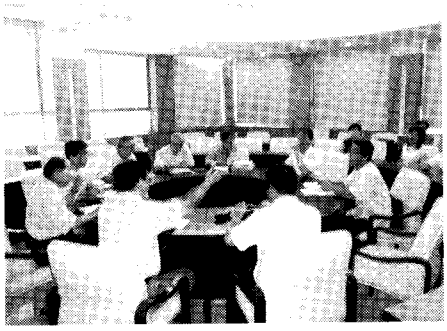
⑤KFG技術担当者は指揮部の技術者・関係者と2日にかけて、2期緑化支援地へ赴き、土地条件の特徴把握のための植生調査および菌根菌を利用した緑化試験のやり方について打ち合わせを行った。

⑥甘粛農業大学林学院の先生方との懇談会において、林学院は指揮部と共同研究やアンケート調査の経験を有することなど。
また、大学との交流として、2007年9月に学生を対象に講演を行うことの申し入れに快諾された。

＊第2回目は、9月20日～28日、担当メンバー6名が現地活動を行った。

①蘭州市外事辦公室の訪問。学校交流について先回の訪問およびその後、数回の電話交渉の結果、具体的に蘭州市第19中学を特定することになった。

②第19中学の訪問。学校に対して生徒達との植樹交流の打診。また、環境教育の一環として、KFGが講演したいとの申し入れには2008年春を目途に進めることになった。この講演計画に関連してKFG担当メンバー3名は更に2回学校訪問し、具体的な協議を行った。



甘粛農大との座談会

③第2期植樹ワーキングツアーの活動。9月22日、KFG会員40名、指揮部4名そして元留学生柴生芳たち4名計48名が第2期緑化支援地において、三水造林によるベニスナの植栽を行った。今回からはポット苗とは言え、第1期のコノテガシワの大苗による作業に劣らず、30度～40度の斜面地での植栽も結構しんどい作業だった。それでも午前中には2,000本ほど植えた。
午後からは第1期緑化支援地を見学し、生育状況や竣工間近の緑化文化展覧舘と市の緑化政策の説明を受けた。また、第2期緑化支援にかかる協定書の調印式を行った。

④蘭州市緑化委員会の訪問。KFGの緑化支援活動の経過説明、三井物産環境基金助成による活動推進に伴う準備調査の訪問趣旨を伝えた。これに対し王主任からは委員会の構成、活動状況、義務植樹などについて説明を受けた。

⑤本会スタッフが甘粛農業大学で“日本の自然と森林・林業”と題して講演を行った。講演終了後、聴講した学生達85名にアンケート調査を行った。引き続き、李院長らと共に、一般市民を対象としたアンケートに関する共同調査の可能性について意見交換を行った。後日、KFG担当者は再度李院長を訪ね、アンケート調査に関しての業務内容・委託費などの具体案の打ち合わせを行った。

⑥KFG担当メンバー3名は指揮部の技術者と第2期緑化支援地に設定した試験地に赴き、試験の進行状況を調査した。また、他のメンバー3名は第19校へ。

⑦蘭州大学・草地農業科林学院と外国語学院日語系学生との懇談。
大学側助教授3名と日語系4年生3名と外事辦公室1名、KFG側6名、指揮部2名との懇談では、日語系の学生が交互に通訳になり、KFGの活動内容や助教授3名の研究内容、そしていろいろな意見交換を行った。日語系学生が通訳実習を兼ねて、一生懸命に努めている姿は微笑しい雰囲気であった。また、この交流は、今後の緑化活動の展開に対してもすばらしい機会であった。

⑧認養地の視察。指揮部の案内でメンバー6名は、黄河北岸の九州台にある認養地を視察した。この制度は、2007年4月からはじめられたもので、緑化のために自発的に寄付するものである。認養する木は樹種、大きさによって単価は異なる。その木に認養者の名前、樹種、日付が書かれた名札が掛けられる。寄付したお金は植栽、灌水などの管理経費に使われる。緑化の為に寄付するという行為がどのように定着していくのか追跡の必要がある。

三水造林の試験地を見る

植樹ワーキングツアーに参加して

夢は緑の森

ＫＦＧ会員　稲木　稔

今の会社に入ったとき、書類の中に徳岡先生の名刺を見かけました。中国にいっておられるのを知っていたので、私も中国にはちょこちょこと旅行していますとメールを送ると、今回のワーキングツアーを紹介していただきました。これまでシルクロードの旅には何回かにわけていっていましたが、河西回廊やタクラマカン砂漠を行く旅だったので砂漠を通ることが多かった。今回は天山山脈の北側の草原地帯に足を踏み入れ、その中でもカナス湖の雄大な景色。湖と草原と針葉樹の樹木が一望に見渡せる風景には感動しました。

植樹は半日程度で終わりました。私が過去の緑にかかわった仕事は、そのつど完成されるものであったが、今回のように息の長い作業を続けていけば、樹木の生長・土砂流出の減少で、すばらしい森になるのではと期待しつつ植樹させてもらいました。

これからもできるかぎりワーキングツアーに参加させてもらいたいと思っています。

継続は力 実感

ＫＦＧ会員　土井 雅之

今年のワーキングツアーに初参加させていただき、植林の後、第１期記念林を目の前にした感激を今でも思い出している。

まっすぐ伸びた道の向こうに、おむすび形をした小山が見えた。びっしり緑に包まれているとは、まだいえないが、樹木が上下左右に整然と育っている。最大３ｍ近くに育ったコノテガシワを中心に、合計なんと13万2000本。

７年前から始まったという蘭州市政府との共同作業の成果だった。始めたころは、木は一本もなく、雨が降ると土壌が流れ、砂漠化現象が始まっている荒山だった、という。
小山のふもとにある「中日友好林記」と書かれた記念碑には「日本黄河の森緑化ネットワークは、毎年この地を訪れて植樹し、緑を与え、金城を輝かせる」とあった。
「継続は、力だなぁ」。なんだか胸のなかに気持ちのよい空気を一杯吸い込んだような気分だった。

第２期記念林に植えたベニスナは、大きくなっても最大1.5ｍにしかならないという。しかし、それがしっかり根を張り、あの荒山を、緑のじゅうたんに変える日が近いことを夢見ている。植林の後、ズボンやシャツを真っ白にしながら輝いていた皆さんの顔が忘れられない。

ベニスナの植え方を教わる

他生の縁

ＫＦＧ会員　塩田 茂子

91年の夏、初めて中国を訪ねた。居延漢簡の大家Ｏ先生のお誘いによるものでした。北京、西安を経て蘭州での世界木簡学会に参加される多勢の先生方に門外漢の私たちも同行させていただいたのです。学会のあと、小型バスに分乗し河西回廊を敦煌まで。この間周到なお世話をして下さったのが甘粛省博物館の時俊蘭先生でした。彼の日本語は大変流暢。独学とのこと。私は瞠目結舌。大自然、歴史的建造物、熱い心。以後私は中国迷に。

この程、ＫＦＧの活動を知り、又蘭州に行く機会に恵まれた。時先生はお元気だろうか。過大な期待は禁物と自制しながら蘭州の初日、案内の丁国輝さんに言ってみた。この方の消息を知り度いのですが。丁さん曰く。この人僕の友人です。昼食が終わらぬ内に消息が伝えられた。半年の予定で山東省へ出張中のこと。午後訪れた博物館の職員さんから博物館裏の宿舎にご家族がいらっしゃることも教えてもらった。お元気でご活躍の様子、うれしかった。

夕食時、ＫＦＧの魁柴生芳さんから、ご自身は嘗て京大のＴ先生のゼミに参加していたことがあると伺った。Ｔ先生も16年前のメンバーのお一人。奇遇でした。袖振れ合うも何とやら。翌日、細い細い糸ではあるけれど更に強く永く続くことを願いながら一本また一本、心を込めて紅砂を植えた。

旅行の思い出

ＫＦＧ会員　久保 ナガ子

去年の９月、私は中国植林旅行に３年連続で参加しました。今思い出すのは、イリとアルタイの圧倒的な草原の広大さ！森と湖のコントラストの美しさ！１時間近くも馬に乗って、あの草原を疾走？した爽快さ！そして最も楽しみにしていた国際バザールを、一方的にキャンセルされた無念さです。本当にあの時行っていれば、素晴らしい掘り出し物があったに違いないと、今でも思っています。

蘭州での植林は、例年とは場所も木も植え方も違って、最初はとまどいました。去年までの苗木ではなく、小さな草みたいな苗で、膝の悪い私は座り込んで植えました。「小さいから歳の数だけ植えるぞ！」と意気込みましたが、急坂を横に移動するのも恐る恐るで、息子の歳の数だけ植えるのが精一杯でした。でも皆さんが頑張られたし、苗も小さくても生命力がありそうで、下から見上げると緑が明らかに多くなり、明るい未来が開けるように感じました。

実際３年前、初めて蘭州に足を踏み入れたとき、あまりのハゲヤマに愕然としました。飛行場を出て、バスが走れども、走れども、左右前後、ずーと禿山でした。こんな所に木を植えにきて、何が変わるのだろう？と正直思いました。でも３回目の去年９月、同じ場所をバスで走りながら、明らかに景色が違うのを感じました。確かに緑が多くなっていました。何だか自分たちの手柄のように嬉しく思いました。「継続は力なり」と言う古い格言が頭に浮かびました。

今年は何処に連れて行って下さるのでしょう？植林はもちろん１番頑張ります。でもバザールも！絶対キャンセルなしで！よろしくお願いします。

私と環境(8)　丹波市・下滝いろいろ

ＫＦＧ会員
村　上　鷹　夫

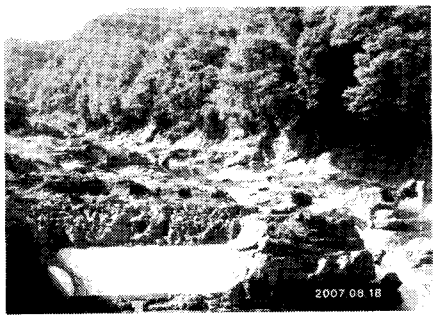
「まとめ」

下滝いろいろでお世話になって３年になろうとしています。

最初は「モリアオガエル」、２回目は「ヒキガエルと黄河の森写真展」、３回目は「花祭りと季節の変化」、４回目は「姫ぼたる」、５回目は「丹波竜発掘ボランティア」で、好き勝手に述べてきましたが、ネタギレもあり今回で終わりとさせていただきます。

①環境に優しく人に優しい稲作を求めて合鴨水稲同時作を始めて15年、田圃に生きた化石といわれるカブトエビやホウネンエビ・糸ミミズ等が戻ってきました。古代米で28mの丹波竜の絵を書き、合鴨の進水式を行ない多くの見学者に可愛がってもらいました。そして優しい稲作を求めておられた人が、今年から合鴨水稲同時作を行なわれることになりました。

②生き物が住め・生活排水を浄化するため、今までは農閑期だけ水を流していた水路に、「農地・水・環境を守る会に」提案し１年中水を流す事が出来る様になりました。少しの水溜りに生きていたシジミ・スジエビ・ヌカエビが増え、近い将来50年前の様にウナギやモクズガニが戻って来て子供達が網を持って水路に入る日を楽しみにしています。



丹波竜発掘現場と川代渓谷
※左下の白い所が現場です

親子恐竜のモニュメント

③丹波竜が発見された川代渓谷は、２万年前に出来た新しい峡谷です。地層が現われ・断層や貫入岩が見られ、春は山が笑い桜が咲き秋は紅葉が美しく、ホトトギスが鳴きカワセミが飛ぶ素晴らしい渓谷です。

昨秋、丹波竜発掘現場の岩石を台座とし中国の石を使って、丹波竜のモニュメントが下滝駅前に完成致しました。

そこに刻まれている「ふれあい親子恐竜」からのメッセージです。

「私たち親子は今から１億３千万年前にここに住んでいました。

丹波の山なみと川代の美しい渓谷が大好きでした。

縁あって2006年８月７日に見つけてもらいました。

みなさんが、自然を大切にしこの環境を守り、丹波の美しい風景が、いつまでも変らないことを祈っています。」

長い間、ありがとうございました。

絵本からのエコ・メッセージ Ⅵ

「サリーのこけももつみ」

ＫＦＧ会員　畑　中　弘　子（児童文学者）

ある日、サリーはおかあさんとこけもも山へ、こけもも摘みにいきます。丘いっぱいにみのっているこけももを、摘んでは食べ、摘んでは食べているうちに……。おかあさんはずっと先にいってしまいます。

いっぽう、反対側から、子熊がおかあさん熊と、こけもも摘みにやってきます。子熊は「大きくなれるようにたくさん食べておおき」という、おかあさんの声をきいて、一生懸命こけももを食べます。おかあさん熊は先へ先へいってしまいます。

こうして、サリーはまちがって、母熊のあとを、子熊はサリーのおかあさんのあとをついて歩くことに。

自分のこどもでないと知ったおかあさんたちは、いったい？

以下は最後の章です。

「子熊とおかあさん熊は、冬の間も身体が弱らないように、ずっとこけももを食べながら、こけもも山を降りていきました」

「サリーとおかあさんはこけももを摘みながら、自動車のとめてあるところまで降りていきました」

ほほえましいハッピー・エンドとなっています。

大自然のなか、おおらかに生きている人や動物たちの喜びを、なにものにもかえられない幸せを感じさせてくれる絵本です。

ロバート・マックロスキー作・絵
石井桃子訳／岩波書店

黄土高原の植物Ⅸ

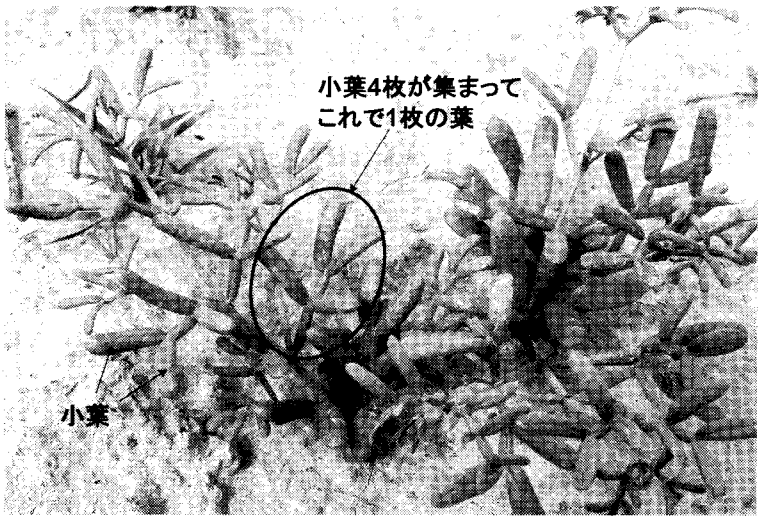
念念を踏むな！　－意外に急な黄土丘陵－

ＫＦＧ顧問　徳 岡 正 三（元高知大学農学部教授）

私の中国とのかかわりは沙地（さち）という一見砂漠に似た荒れ地の緑化を考えるところからスタートした。沙地には砂の山である砂丘があるが、それを除くとあまり起伏がない。砂丘も高さは４～10mしかない。だから沙地歩きには難儀というのをあまり感じない。ただ、道はなく、広くて似たような風景ばかりなので、うっかりすると方角を見失って迷いやすい。沙地歩きでは磁石が必携である。とにかく中国ではこうした沙地を中心にみてまわり、山歩きらしいのはほんの少ししかしたことがなかった。それも歩いていて危険を感じるような山歩きではなかった。

ＫＦＧとお付き合いすることになって、沙地から黄土高原に変った。私が黄土高原に持っていたイメージは起伏の緩やかな丘陵の集まりであった。ＫＦＧの第１期支援地も起伏があまりなかった。ところが、このたび三井物産環境基金の助成を得て少し深くかかわることになった第２期支援地を歩いてみて、見方が変った。意外に険しいのである。改めてよく黄土丘陵をみてみると、１期のようなところは珍しく、たいがいは険しいのである。

蘭州の黄土丘陵はマオ型といって、お碗を伏せたような丘が寄せ集まったようにみえる。伏せたお碗だから上は緩やかであるが、下へ行くほど急になる。傾斜度を測ってみると40°前後はざらにある。一番下はとても急で普通には上り下りできないところが多い。傾斜が急でも大きな木がたくさんあれば、それほど怖さは感じない。ところがあのように草や低木しかなくて、下までずっとみえる丘陵の上に立つと、40°の傾斜はまるで崖の上から下をみているようである。私のような高所に弱い者にとって、これは怖い。



念念
※棒状の一枚の葉に見えるのは小葉といい、これが２～６枚集まって葉となる。

この２期支援地の丘陵のあちこちでよく見かけるのが念念（ニエン・ニエン）である。私がここで一番はじめに覚えた植物である。念念は乳頭を意味する方言のようである。「葉がおチチに似ている」と地元の技術者が念入りに教えてくれたのですぐに覚えた（今年は雨が多かったせいか、写真の念念は普通よりもよく成長している）。

念念はハマビシ科の高さがせいぜい15～20cmの多年生の草である。植物としての念念も方言で、一般には蠍虎覇王とか蠍虎草と呼ばれる。蠍（さそり）や虎や覇王があり、どうしてか少し恐ろしい名前がついている。

さて、黄土丘陵の急な傾斜地で念念を踏むとどうなるか。念念の葉はふっくらとしている。乾燥地の植物の特徴として葉に水分（汁液）を貯えているのである。これを踏むと中の汁液が出てきて、足がすべる。バナナの皮を踏んづけてすべるのと似ている。急傾斜の下り坂でこれを踏むと悲劇である。くれぐれもご注意を!!

2008年 植樹及びクリーンキャンペーンの日程

担当理事
矢野 正行

会員の皆様およびこの会報をお読みの皆様、明けましておめでとうございます。たぶんこの会報が皆様の手元に届く頃には「明けまして」はちょっとピンぼけになっているのかも知れませんが、私がこの原稿を書いているのは、2008年１月６日です。ご了解をお願いします。

さて、2008年が始まり、皆様方には新しい年に向かい気持ちを新たに飛躍を誓っておられることと思います。我がＫＦＧでも2008年の飛躍をすべく行動予定を立てていますが、私が担当しています「六甲山植樹」及び「六甲山クリーンキャンペーン」でも下記のように日程を決定しました。

六甲山の植樹は六甲山の治山及び住吉山手近隣の方々の防災に大いに役立っている事業です。また、六甲山住吉山手は日中友好林事業の日本側の大切な植樹基地と位置付けており、中国蘭州植樹基地と同様大切に育てなければなりません。さらに、住吉山手植樹基地には多くの桜を植えていますので、５～６年後には「花見の会」なども開催できるのではと楽しみにしています。参加者は事務局までご連絡をお願いします。

皆様ふるっての植樹活動への参加を期待しています。

植樹日程

植樹準備	2008年３月２日(日)	9:00	ＪＲ住吉駅南側集合
植　　樹	〃　３月16日(日)		〃
下草刈り	〃　６月15日(日)		〃
下草刈り	〃　８月31日(日)		〃

六甲山クリーンキャンペーン（六甲山登山道ごみ拾い）

2008年４月６日(日)　9:00　阪急岡本駅駅南側集合
〃　10月19日(日)　〃

点訳と私

KFG会員　久　保　ナガ子

私は依頼された図書を点訳して、点字図書館におさめるボランティアをしています。点字を始めたのは、ちょうど12，３年前、50歳を目前にしたときでした。私はこれまで何をしてきたのだろう？と思いました。１人の男の子を産み、育てただけ。あとはひたすらラケットを振り回し、真っ黒になってコートを走り回っていただけと感じました。

「コレデハイケナイ！」と真剣に思いました。ボランティアという言葉が自然に浮かびました。点字と手話どちらにするか？思案しましたが、点字を選びました。理由は簡単。点字のほうが自分の空いている時間で出来ると思ったからです。思い立ったら速いのが私の特性です。親友を巻き込んで、住吉の英語点字スクールに通いました。先生は全盲だけど、アメリカ留学の経験もある若い素敵な女性でした。結構一生懸命に勉強しました。そしてもうすぐ卒業というとき、あの阪神大震災がおこりました。スクールの建物も全壊！とても残念に思っていた４月ごろ、思いがけず先生から電話がはいりました。「点字を続ける気持ちがありますか？」「はい！」即答しました。これが今に至る私の点訳の歴史の始まりです。

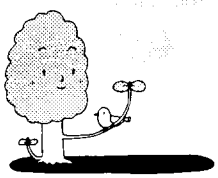
初めは先生を支えるグループに入れていただき、先生の読みたい本（英語本）を点訳しました。間違いだらけを指摘されながら、何度も打ち直し、毎日数時間点字を打ち続け、週１回の勉強会にも必ず出席し頑張りました。

３年後にそのグループのリーダーに指定され、兵庫県のボランティアグループの集まりなどにも出席するようになりました。でもそんな会合で他人に尽くすことが天職と考えている人たちが、たくさん居ることを知りました。私には無理！と感じました。私はテニスもしたかったし、ランチも食べに行きたかった。でもグループとして、先生以外の人の点訳依頼も引き受けるようになると、大忙しになり、否応なく点訳三昧の日々になりました。そして２年後先生から「新しい点訳者を育てる助けをして欲しい」といわれ、決心がつきました。「ボランティアだけの人生は私には無理です」と率直に打ち明け、やはり同じ思いの親友とともにグループを辞めました。でも点訳は好きで続けたいと思いました。色々捜して、今の点訳図書館を見つけました。そこのシステムは、まず図書が送られてきて、それを点訳し、送り返すと、添削して返ってくる。それを打ち直して送ると、製本になって図書館に置かれるという仕組みでした。私にピッタリだと思いました。日本語の図書が多いので、通信教育で日本語の点字を勉強し直して、点訳者登録をしました。

私はいま朝家事をし、昼間は遊び、夜２時間点訳をするという生活をしています。１年に２冊のゆっくりペースです。でも私に合うやり方にやっと辿りついたと思っています。図書館に行って、久保ナガ子点訳本のコーナーに行くと、結構何人もの方が借りてくださっているのがわかり、頑張らなくちゃ！と思います。

点訳者は年々年を取り、目や指の力の衰えで、数が減っています。もし興味のある方は挑戦してみていただきたいと思います。男女　老若一切　問いません。

事務局からのお知らせとお願い



＊第５回通常総会を下記の通り開催します。

日時：５月17日（土）　PM.13:30～14:30

場所：神戸中華会館７Ｆ（トーアロード）

なお、終了後、三井物産環境基金助成事業の中間報告と交流会を行ないます。会員さんには、後日ご案内をいたします。

＊2007年度の会費（2007.4.1～2008.3.31）がまだの方は、よろしくお願いします。また、寄付をお考えの方もよろしくお願いします。